

ることは叶はないのだ。

あの面影、お聲、今でも耳の奥底深く聞えてくるやうだ。  
あの慈愛の深い先生は、やはり戦地へ行かれてもお情のある  
小隊長だつたらうに――。先生の愛馬が弾丸に中つて苦しん  
でゐる時軍の掟として銃殺せぬばならないのをどうしても自  
らの手を下せないとして部下に殺させたとか。この様な事も先  
生には當然の事であらう。あの慈愛に満ちたお顔がまぶたの  
裏に今なほぼうつとしてゐる。次から次へと新たな追憶がよ  
みがへつてきて暗然とするばかりだ。あゝ然しどんなに思ひ  
到るともお歸へり下さらない先生。御遺族の方の御悲しみは  
どんなにと思ふ時更に胸は迫るのである。然し乍ら先生のこ  
の御功績は永久に我が青史に輝き英魂は靖國の護神と仰がれ  
給ふのである。我々生徒は先生のこの名譽をきつづけず先生  
の御心に副うて、益々君國に盡すべき立派な國民となるべく  
學業を勵み心身を練り、お報いせねばならない。あゝ先生お  
安らかにと御冥福をお祈り申し上げるばかりである。

### 嗚呼、千原先生

二年 一谷 眞治

嗚呼！その時の我が彦中の悲しみ？驚き惜しみはどんなで  
あつたらうか……。萬歳して〇〇の地に華と散られた千原

### 弔 詠

師の君は散りぬ散りけり山櫻教へ子吾に仇うてとこそ

大君の御楯と命散りてける師よやすらかにねむりませいざ

ねもごろに諭し給ひき召されては武人としての範垂れ給ふ

いつの日か沙窩を尋ねて師の君の靈弔はん捧げ銃して

山萩を手折りて在りし師を憶ふ秋風強き城山にして

軍帽に微笑み給ふ師の寫眞呼べども今は答へしませぬ

勇ましき師の軍装の面影は今もまぶたをはなれざりけり

大君の御楯となりて散りはてし師が勳は朽つることなし

たちねの親と慕ひしありし日の教への君は今はおはさず

とどろける火炮の響今は亡き教への君の勳と高し

學び舎の慈父と仰ぎし師の君は護國の神となりましにけり

先生の御無念はもとより、その報が一たび校長先生の口から  
傳へられた時――丁度その時は汽車の餘韻がごう／＼と唸つ  
てゐた時だつた。喜びも悲しみもよく知つてゐた大銀杏はこ  
の時程嚴肅の眞の極に達したことはあるまい。

思へば先生が渡支なされて以來征戰の御多忙中を幾度本校  
宛に我等宛に先生からお手紙をいただいただらうか。そして  
戦死なされたといふことは我が校の校訓たる「至誠奉公の國  
士」の範を御躬ら我等にお示しになつたのだ。思へば先生に關  
してのお話は數限りもあるまい。しかしその中には我々の  
よく知つてゐるお話もある。お優しい先生――とのみで考へ  
てゐた時分よりは一層考へさせられるものがある。

これからはキツト今後我等赤鬼の健兒が大陸に發展する時  
が來ればその頃には先生はじつと我々の行先を見てゐて下さ  
るのだ〇〇の地から天から否靖國の御社から……。

特に私は私の屬する學友區の受持の先生として一層何かな  
つかしく感ぜざるを得ない。

○  
沙窩の地に新墓立ちて秋寂し

先生に手向けの文や秋の雨

落葉風激戦の日の師を想ふ

師のみたまそれと香るか菊の花

五年 尾 本 庄 三

五年 李 炳 漢

五年 一 谷 道 雄

五年 同

五年 新 田 敏 夫

五年 同

四年 林 榮 一

四年 寺 村 道 夫

三年 森 野 佐 久

二年 同

二年 大 平 喜 三





## 消 息

次の通信は支那事變現地の本校御卒業の方又は本校在學生徒の父兄の方から寄せられたものです、實は既に百通に餘る御通信があったのですが、紙面の都合上止むを得ず代表的に四通だけを陣中だよりとして掲載することに致しました。

### 陣 中 だ よ り

久しく御無沙汰致しました寒さの折柄皆様御障り有りませんか北支は昨今零下十數度に降り地表の水分は河水飲料水の別なく總べて凍結して居ります私達は六十數日の行動を終へまして去月末御蔭様にて元氣一杯駐屯地〇〇に戻つて参りました之れからは暫く警備等色々仕事も御座います御手紙も頂く事が出来又新聞も遅ればせながら拜見出来ラデオも聞ける様になりました。

かねて校長先生より御案内を頂いて居り楽しみに致して居りましたが皆様方芳情溢るゝ慰問品の數々本日有難く拜受致しました曩には同窓會の方々より今又學校御一同より重ねの御配慮を戴き御芳志の程萬謝致します。

第一學年 若林茂也君、慰問文有難う國家總動員下の中學生として御奮闘下さる趣衷心より感謝致します銃後の聲に和して第一線も我おとらじと努めて居ります御安心下さい。彦根市三番町 馬淵利信君、御心盡しの雜誌有難う戰塵の合間に拜讀して懐しき祖國を忍ぶ事に致します。何卒學友諸兄に宜しく御傳へ下さい。新しき建設の昭和十四年を前にして赤鬼魂の發揮と彥中の發展を祈りつゝ筆をおく  
十二月十七日

愛知郡豊國村出身 桂 卷 喜 一

謹啓 長々御無沙汰申して居りまして申譯け御座いません早やいものにて聖戰に奉じてより一年四ヶ月支那の土の上に支那の水を飲むで日を送りました其の後先生には益々御壯健の趣寫眞にて拜見御目出度う御座います不肖も先便差上げし後も相變らず北支〇〇に駐留し病院勤務に従事致し居り甚だ健康にめぐまれ居ります何卒他事乍ら御放念を給はり度。

扱本日は又も御慰問品過分に御恵み下さいまして誠に有難う御座いました別して出征者子弟の寫眞を頂き何よりの御慰問と深く感銘致しました有難う御座いました。

御蔭を以ちまして山西も殊に太原も日明朗化致し最近内地より視察に見えし人は全く内地の延長としか感じられず支那へ來て居ると言ふ感が甚だ少ないと言つて驚いて居られま

今回行動致しました地方は敵が昨年未廣軌鐵道に取り換へるのだと住民を騙してレールや枕木を一本残らず取去り鐵橋を壊はしなどした二十里餘りの路盤に我が鐵道隊が鐵道を敷設中で雄々しい掛け聲や勇ましい汽笛が山奥に響いて此の年内には日章旗を掲げた列車が堂々と邁進する事でせう。斯うして我が東亞建設は着々進行し占領地域は彌々擴大し敵は益々山奥に追はれつゝも山村に出没し村長や農民を脅迫して食物や燃料などを掻き集め冬越の仕度に大童になつて居る様ですがそれにしても聖戰第二年も後十數日で終らうと言ふのに彼等はまだ青少年や婦女子など狩り集めて抗日宣傳や軍事教練に狂奔して居るとは慨歎に耐へない次第であります何れ又度々彼等を討伐に出掛ける事と存じますが皆々様方の御蔭によりまして出動以來至極壯健で任務に勵げんで居ります何卒この上ながら御援助の程お祈り致します。

取敢へず右御禮旁々近況御報告  
十二月十七日

彦根中學校御中

桂 卷 喜 一

第一學年 岡城武雄君、立派な圖書を有難う嬉しく拜見致しました。

第二學年 谷村肇君、立派な習字を有難うこの意に添ふべく努力して居ります。

した。兵隊が澤山居ります勢ばかりではなく居留民も澤山になりあまり香しき事にはあらざれ共町にはネオンサインも四五軒はつけて居ります。支那人も段々日本人の指導に従ひ明朝北支建設にいそしむで居ります。

武漢廣東皆すでに我が手中に入り戰爭は第三段に入りつゝあります。眞に東洋平和來を叫ぶときは只今日本人及親日支那人によつて行はれて居る小學校(支那)生徒が大人になつたとき、又内地的には今日の非常時を目のあたり見味ひつゝはぐくまれし小中學生が大人となり大陸へゝと進軍する様になつたときだなと現地では痛切に感ぜられます。日本人はもつと腰をおちつけて本事變の處理にかゝらねば目的達成出来ないと思はれます(特に〇〇にて見る日本人居留民の狀態にて)。

甚だ不尊なる愚見を申し上げましたが今日我々が現地に於て感じつゝある事を其のまゝに申し上げて御參考にもなりましたらと考へまして、尙毎々愚弟章雄事格別の御指導を給はり有難う御座います何卒精神第一主義にて嚴格に御教鞭をたれ給はらむ事を末尾乍ら御願ひして御禮の御挨拶までに。

章々頓首

十二月十五日

〇〇部隊 山 口 保 雄

足立芳之助殿



拜復 御懇切なる御書面を賜りたるのみならず數々の御見舞品を頂戴致し寔に有難く深謝仕り候、今日迄可成りの激戦を致し候も無事生を全うし居候事は陛下の御稜威の然らしむる處にて候へ共一つには皆々様方の御後援の賜と深謝致居候我々の日々の努力も着々奏効致居候も新東洋建設の前途は遙々たるの觀有之候自らの職責を自覺し益々健闘致居候間御休心願上候、何卒益々銃後の御活躍を願上期待仕り候烏計がましき次第にて候も、先輩の一軍人として第一線より後輩在校生諸兄に亂筆一文呈上仕り候老婆心の表れとして御一瞥願へれば幸甚にて候

十二月廿四日

北支派遣〇〇部隊

上田 誠 治

足立芳之助 殿  
同窓各位 殿

御懇切なる御手紙真心のこもつた慰問袋有難く拜受致しました。

同窓の同中隊柴田浩嗣少尉と共に自室に惠與の手紙々至誠奉公⑥を penant として掲げ一夕昔話を花を咲かせました併し運命は豫知出来ないのです。柴田少尉はその翌日中隊宿舎より一〇〇米と離れない道路上にて便衣の敵に拳銃にて

原則がなる程と血を以て體驗させられます。力に溢れ純真溢るゝ諸兄には老婆心の表として聴いていただき度いですが諸兄が否我々も嘗て唱へて來た赤鬼魂も四季を通じての試験勉強で事足れりとする生徒によつて心易く流行歌的に讃へ崇められて居る限りは既に誇とするに足らず傳統をたて築く事はおろか繼ぐ事も出来ないであります。此の非常時に學校に居られる諸兄を或る半面に於て時節柄不自由な思をされる事もあらうと御同情致します。併し諸兄はのぞみ燃え生命あふるゝ若人です赤誠き力に溢ちて自重し井伊大老の茶道一會集にも所謂一期一會の精神を以て御奮闘されるを切望致します自分等の生徒であつた時足立校長先生は中學校の課程は我々が世に處する必須の常識を教育するのだ。」と屢々申されましたが自分の経験からしても中學時代怠けた爲上級學校生として或は社會人として必要に迫られて基礎的に中學校をやつて置くべき事をやり直すこともあれば先生の御教訓が今更ながら判つて來ます。何はともあれ諸兄も新東洋を双肩に擔つて歐米人に優先して活躍すべき方々でありますから將來の雄飛に備へる爲にも御自重御精進を願ひます。近頃内地ではナチ綱領の實踐と言はれる arbeitdienst (集團勤行) を取り入れ普及して居る様であります。日本の軍隊が強いと言はれる所以は、絶対服従の下に小我を最極限にまで棄て、闘ふに在ります従つて我軍隊にてはファシストイタリー或はナチの

狙撃され胃、大腸各二ヶ所貫通腎臓に僅か掛る負傷をされました。併しながら我々が駐屯して居た事、占領後間もなき此の市街に野戰救護班が設けられ手術器材があつた事、慶大出身の新進外科醫學博士松丸見習醫官が居られた事、白晝のため即時手術出來た等々戰場では到底想像にも及ばぬ好條件がそろつて居た爲経過至つて良好なのは不幸中の幸でした。地圖上では國民歡呼の裡に占領地域は擴がり行き慶祝至極であります但我々の居ります中支は未だに多くの敵正規軍が居り空陸協同の作戰を以てしても簡單には陥落しない市街が多いです。今我々の居る〇〇も晝夜猛攻血を流して占領した市街であり今日に到るまで毎夜の様に我兵力に數倍する敵の夜の慰問團に見舞はれて居ります。滿洲の匪賊とは異り戰闘法、工事等より見て相當な訓練を経たと思はれ跳足で隱密に近接し冷寒の晩のクリークを腰まで浸りながら涉り猛烈と白兵戦に訴へて來る等内地の兒童漫畫に描かれた支那兵の觀念は改めねばならぬ事が屢々あります。翌朝我が銃剣に墜れた敵死體を見れば彼等は諸兄と同年輩の強固なる抗日意識に燃えた青年でありその氣魄に於ても戰闘動作に於ても輕蔑し難きものであります。私の體驗によれば生命を投出しての仕事の前には一切の虚飾は不要です。具體的に申せば如何に巧妙なる机上の作戰も粗朴な精神のこもつた實行には及びません——血を以て綴られたと言ふ簡單な歩兵操典を始め典範令の

發生以前に既に武士道的信義に基く強固な團結をして來て居るのであります。諸兄もどうか流行的氣分で外面的な體力訓練のみで集團勤行されることなく率先躬行進んで苦難に臨み質實にして青年的氣魄に滿ちた精神的御修養を願つてやみ鍛せん。

烏計がましい次第ですが雜感亂筆のまゝ諸兄への御返信とします。我々も一軍人として及ばずながら努力を續けませう今夜も敵の斥候が盛んに出沒して居ります。夜が明けるまでには一仕事出來るかも知れません。支那の新春も近い様で遠い様な感がします。昭和十四年も新東洋建設の礎として何處までも何處までも進軍戰闘を續けて行きませう。死なば靖國生くれば故郷、何處にも幸福が待つて居る。〃

之は我々の daily motto であり將來への hope であります。

昭和十三年十二月

北支派遣〇〇部隊

上田 誠 治

赤鬼健兒諸兄殿





## 第五學年饗庭野演習記

### 第一日

吾等彦中第五學年百二十餘名の生徒は五月十九日より廿一日に亘る三日間の饗庭野陣軍廠舎に於ける演習を實施せり。朝禮後武裝を整へ校庭の大銀杏の下に整列し、校長先生より訓示をうけ、次に杉原先生より種々注意あり。午前九時行軍ラッパ勇ましく歩武堂々港灣に行進せり。空はどんより曇りて小雨氣味なり。午前九時廿分全員比叡丸に乗船し舟木に向け離港、懐しの彦根を後に比叡丸は波靜かなる琵琶の湖面を滑り行く。やがて緑の多景島、湖上に浮き來れり。我等は島中に立てる誓の御柱に對し恭々しく敬禮をなす。南方を眺めば沖の白石その奇觀を現す。斯くして午前十時四十分舟木に到着せり。彦根の方を望めば杳として遙か彼方にあり。野に出

で、小嶺後藤神社に向ひ一路竊進す。前山に氣味惡き黒雲懸れり。前途不安なり。行軍約一時間にして正午前神社に到着せり。一同參拜、後池邊にて晝食をなす。鯉池中を悠々泳ぎ恰も藤樹先生の徳を慕ふが如し。午後一時前頃神社を出發藤樹先生の御墓に參拜し更に藤樹書院を拜觀せり。今野先生より種々藤樹先生に關する説明あり。院内に「致良知」の幅あり。先生の筆に成るもの更に先生の御衣服を拜見し、その質素なる生活を察知せられ、その令徳の一端を偲ぶことを得たり。書院の西方に花咲ける藤の大樹あり。その下に先生は講義せられしといふ。これ藤樹の名の起因をなす。我等は書院を後に今津に向ひ行進を開始せり。日は雲間より頭上に燒付く如き光を投げ、汗はシャツ上衣を通してば

背囊にまでにじむ。安曇川を渡り江若線を横斷して進軍す。行進約一時間半にして休憩全軍柳が疲勞の憩なり。されど我等は彦中健兒なり。如何なる苦痛も物かはさ、やがて行軍を續行す。行軍再び約一時間余にして目ざす饗庭野廠舎に到着せり。時に午後三時四十分なり。これより入舎準備にさりかゝれり。今日の行軍にて我等は全支に活躍せる我が將兵の勞苦の一端を味ひ、はるかに感謝の念を深む。午後六時半夕食せり。夕食後舍内にて互に話などして時を過す。午後八時より守田先生より兵營生活に就いての訓示、滿洲に於ける先生の御經驗に就いて種々御話を承る。つゝいて杉原先生より注意あり。午後九時より毛布にて各自床を作り、日夕點呼を受け九時半就床せり。翌朝の起床は五時半決定。就

### 第二日

シト／＼と降る雨と共に廠舎の夜は明けた昨夜は星河一天、山黒くして月幽に、風露肌は冷やかにして明日の晴天を期待せしに、今朝は之に反して、雨雲次々に現はれ、瞬時にして止む様子はない。

朝食後。集合ラッパを合圖に廣場に集合、直ちに饗庭野原野に向ふ。此の時より滿目の雲霧白み明るみ始め、四周の連山白濛々として居たが、最早や晴も遠くはないと思はれた果して演習場に到着した時には雲間より太陽が輝きはじめ、緑の大原野は雨に洗はれ、緑は碧に燃え立つ感があった。

少憩の後。大俵山の隘路より現はれた今津中學軍との間に攻防戦が展開された。彼は我に二倍する大軍で我等彦中生の守る高地へ見る／＼中に散開し、包圍の隊形を造つて進んで來た。敵は猛烈に射撃しつゝ包圍陣をだん／＼縮めて來る。味方は未だ火蓋を切らず敵の近づくを待つ、敵が前進の爲立上つた、間一變大隊長の射撃命令は下つた。待つてました

とばかり機銃は怒り、小銃は火を吐く。

射撃！射撃！又射撃！

靜寂たりし曠原の朝は悽絶の氣漲り、大地を震はし、絶叫し怒號しつゝ、急襲の如く彈丸を注ぐ、時々刻々、左に右に、將棋倒しに敵は隕れ、味方の數多の勇士も傷き、土塵と煙は日光を遮り、風を呼び、彼等の戦火正に酣その時、山々に木魂する突撃ラッパ。「突撃に……」と小隊長の三尺の秋水は空に大きく孤を描いて前進——我勝ちに壕を跳り出し血を求めて鳴る銃剣を擬し、絶叫して今や白兵戦に移らんとする折しも、休戦ラッパは千仞の谷に響く。雙方の將兵、頬には血が上り口は一文字に結び、一瞬の感激、斯くして戦關終了。ホツとして不圖足下を見れば、薄紫色の可憐なる草花が埃にまみれて深くうなだれて居た。

引續きて、今津中學三年生以下が防禦軍となり、彦中健兒と今中四・五年の精銳の聯合軍の攻撃に轉じた。今中何者ぞ、我に赤き彦中魂在り。と身の引締まるを覺ゆ。

戦況説明の後、「前進」の命令愈々下りぬ。各小隊は先づ疎開隊形にて次第に敵に接近す敵は高地に三段構へて抵抗して居る。

彼等の距離約六百米！分隊は互に左右に散開し、輕機は唸り始めた。「前へ……」伏せ！……距離益々縮り小銃も輕機銃の線に増加。銃聲いよ／＼盛んに、志氣いよ／＼昂まる。

前進——射撃——攻撃——發砲！

彼我愈々近接し、砲火猛烈を極め、強き硝煙の匂は鼻をつき、砲聲山雲に木魂し、白煙一帯を覆ひて修羅の巷に化す。かくて戦關の白熱化する時、突如。唳唳と響く突撃ラッパ！「突撃に——前へッ……」馳けよ大地跳べよ、大地を、と死物狂ひて走る。

「突込め！」「ブアッ」「ブアッ」と萬雷一時に落つるが如く、四周を震駭し、我負れじと突入し、敵の第一線を瞬く間に破り、第二線を直ちに突破し、第三線目がけて高地を駆け登りて正に入り亂れて相闘はんとする一刹那、休戦ラッパは上空に響き渡る。

折しも空を見上げれば暗雲低迷し、雨將に沛然と到らんぞ。

雨の爲午後の演習を中止し、廠舎にて飯盒炊事をなし、午後五時三十分。夜間演習に出發す。

秋ならば、野の虫のすだくであらう此の曠



原を二軍に分れて再び山頂へ進軍す。山頂に於て兎山方面に駐軍せる敵に對し、左配の想定の下に陣中勤務を行ふ。

一、敵軍ハ我軍ト略々同等ノ兵力ナリシ、兎山附近ニ來リ、ソノ後前進ノ模様ナシ二、我ガ小隊ハ前哨中隊ノ第一小哨トナリ兎山附近ノ敵ヲ警戒ス。

小哨長の命令一下、直ちに斥候は出發し、歩哨は位置につく。

日没と共に空は再び曇りはじめ、時として雨が頬を撲ち、風は草を靡かし、支那の天地を想はしめ、心は實戦ながらに緊張す。

對峙すること約三時間。斥候、歩哨は本隊に歸還し、やがて本隊は敵を激減すべく前進す。途中、敵の歩哨に誰何されしが部隊は無言のまゝ之を突破し敵の本隊へ迫る。

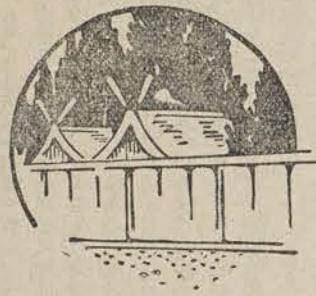
敵もさるもの、敵の主力は道路の兩側に散開し、我が部隊を殲滅せんと待つ。

我が軍はこれに對し中央突破をなさんと、一同黙して語らず、地點にさしかゝるや、敵猛然と砲火を集めず。我が部隊は依然沈黙のまま、早駆にて前進。くくく。前の者に突當り、後の者と衝突し、壕に落ち、水溜りに轉びしが、全員無事に中央突破に成功せり。

の意義大なりと言ふべきである。

八時半今津港より明治丸に乗船、守田先生の御見送を受けて、彦根に向ふ。先生は「テンプを張らにや、感じが出んな」などと言はれながら、棧橋に立つて、長い間手を振られる。一同も、帽子を振り、手を振りなどして先生に應へる。

船は、琵琶湖の最深箇所竹生島の南を、一路彦根へ、彦根へ進む。朝曇りの空はいつしか霽れて、空の青さ、湖の水が相映えて益々青く澄む。船首に躍る白波、追風は、湖上に波をうねらせながら、船を軽やかに、推進



五ノ三 横田不二夫

續いて今度は我軍が防禦軍となり、敵部隊を遂へ撃つべく第一分隊より第六分隊まで戦士六十余名皆一線に並びて百余米の火線を構成し、膝射の姿勢で待機する。

「敵軍襲來!!」の斥候の報告にサアッ!と緊張す。周囲は無氣味な静けさのまゝ、刻一刻と経過する。

突如として約百余米許り前方にて敵部隊通過の發火信號が闇明の空を明かろゝと焦す。間一髪を入らずして「撃て!」と小隊長の力強い一言。

「ドォーン」。ダッダッダッ……と重苦しい静寂を破りつゝ、更け行く曠原の夜氣を震はし、銃身も焼けよさばかりに、硝煙をあたり匂はし、撃ち撃つ。瞬く間に敵は我が精確なる射撃の爲に全滅し、凱歌は高く我方にあがつた。

やがて全員集合し、松明を先頭に堂々廠舎へ引上げた。(以上——一谷)

### 第三日

三日間の廠舎生活に別れを告げる日が來た前日の烈しい教練の疲れのためか、昨日程の早い起床でもなかつたが、五時頃にはもう皆起床してしまつてゐた。

せしめる。

快い船の動揺、波のうねり、スクリューの響き、大洋を行く船を思ひつゝ恍惚に浸る。

乗船二時間にして、我が船は青葉薫る金龜城下、彦根港灣に入る。上陸、三日間の疲れも、消えた様な思ひで元氣に校舎へ向つて堂々最後の行進をなす。

校庭にて、校長先生の徐州陥落の報を聞き又御慰勞の御言葉を受ける。

愉しくもあつたが、相當に苦しい生活であつたが、兵營宿泊の出來ない本年の我々にこつてはこれか中學時代唯一の貴い経験とも言

五時半、杉原先生の朝の點呼が終るゝ、氣の早いのは歸り支度を始める。

六時半朝食、廠舎に於ける最後の食事である。ゆつくりとみしめて、廠舎の米の味を十分に味つた。

食後、毛布を片付けたり、掃除をしたりして、歸校の準備をする。二晩の夢を結んだ廠舎をなつかしみつゝ、丁寧に掃除し一同しみじみとした感慨に入る。

八時廠舎を出發、今津の町の家並にかゝる軒毎に、翩翩として鮮やかに、旭日に映ゆる日の丸の旗を仰ぐ。「さては徐州陥落」。と思つて、覺えず胸を躍らす。

聖戰未だ一歳に満たず。而も、敵首都南京を、掌中に収めえた我軍は、今や頑敵最後の據點たる徐州を陥落せしめた。かくして、我が祖國日本は建國の精神たる、「六合を兼れて以て都を開き、八紘を掩ひて宇を爲す」の大理想を實現すべき第一階程に達し得たのである。

かゝる時局に、かゝる日に、我等百二十有餘の健男兒は、三日間に亘る饑渴野陸軍廠舎生活並びに、野外教練を實施して、第二國民の意氣を高揚したのである。今次の野外教練

へよう、今回の廠舎生活を一人の故障者もなく、無事に終了した事は、喜ばしい事である。しかも、祖國日本は、全世界の指導的立場に立ちて、全世界に皇道を宣布し、全世界に平和を建設せんとする、その途上にあり、我等青年に、祖國日本の期待する所大なるものある今日、この壯行を爲した事は、我々のために、母校彦中のために、又祖國日本の明日のために、大なる喜びであると言はねばならない。(以上——西山)

### 多賀に於ける

## 勤勞奉仕日記

七月二十七日(水曜日)

夜來の雨にも拘らず早朝起床し旅装を整へて自宅を出發、午前八時三十分多賀驛前に全

員集合それより雨中堂々の行進を起して多賀神社到着直ちに旅装を解き御手洗の清水に身も魂も残る限無く淨め本殿前に整列し校長先



生の玉串奉奠最敬禮の號令に一瞬神に至誠を捧げ奉る。而して先生方に引率され指定された部屋に入り各自荷物を整頓。暫くして全員集合音が代齊唱次いで宮城遙拜多賀神社参拜禰宜の方の挨拶を受け、校長先生の訓話にて滅私奉公・團體・行動の修業の三項目に付き、今般の勤務奉仕に於ける神に仕へるの道を諄々説かれ深く我等の心底に響くあるものを感ず。茲に三日間の奉仕に付き更に覺悟を深めた。次に今野先生より再度の「默」のお話及び諸般の注意をお聴きした。

斯くて集團勸行の初式は了り、全員作業服に着更へ元氣一杯境内に集合、時に雨も小止みとなり、空を仰げば斷雲徂來す。先に區分された班が基準となり各二臺の荷車及び砂利入用の味噌箱の配給を受け各車三人宛附添ひ勇躍芹川河原へ砂利採取に向ふ。雨上りの道路は歩行運搬に眞に都合よく、車の帆も輕やかに二十分餘にて採取場に到着、採取係第四班の手にて車上の箱は瞬く間に砂利にて充され運搬係は初めての車を引き乍らも諸身の力を集中して神社へ／＼と牽き去る。折柄、雲間より照り付ける日光は實に堪へ難きも炎熱百三十餘度の支那に於て、命を的に働いて居

て下さる兵士達の勞苦を思へば、これしきの暑さは何のその暑い等と云つて居れる段では無いさ、己が心に自戒の鞭を打ち振つて、勵まし／＼行く中に遂に神社に到着、砂利を出して後に飲み干す湯水の美味さよ。甘露の水も斯くやと許り思はる。斯くの如くして午前中は二回運搬して、作業中止となる。部屋に上り炊事當番給仕當番を定めらる。先づ第一、第四班が之に當る。全員食卓に着くや一分間靜坐今野先生の「頂きます」。とおつしやるお聲に和して一同食事をさる。今般の食事は多賀小學校校長先生の御配慮にて、女子青年學校の方々がして下さつたのである。我々は斯く各方面より好意を寄せて下さる方々に對し、深甚の謝意を表さなければならぬ。食事が了るや午後二時迄各自午睡を取る。所が變つた爲か心なし眠れない。二時になつて午前中の作業を繼續す。三時半頃お八つを頂き暫時堤防上に小憩。四時にて本日の作業を了つた。明日は天氣が。空はよく晴れて來た。歸つて第一班より風呂に入る。規定十分間さいふ入浴は眞に忙しい限りだ。六時、夕の食卓に就く、夕飯後休憩日記を記す。暫くして一同集合し、勸語奉讀に次ぎ、禰宜の方

より神の拜み方玉串奉奠の作法祝詞の講話をお聴きす。それが了る宮城遙拜神社参拜君が代を齊唱し、茲に第一日の行事の總てを了る。

後當番は部屋を清掃し、床を敷き、一同は寢に就いた。僕は不寝番となり、今茲に燈火の下、日記の續きを記す。聞えて来るのは靜かな寢息と夏草に集く蟲の音ばかり。

七月二十八日(木曜日)

五時振鈴と共に起床。點呼後内部の清掃を行ひ、すつかり部屋が淨められると皇居を遙拜、君が代齊唱拜殿に參進して神靈を拜し日本精神を身を以て體驗す。歸つて外に出で一同元氣一杯清淨の大氣に浸つて彥中體操を行ふ。續いて庭の掃除を行ふ。腹を空かして部屋に還れば愈々待ち兼ねた朝食だ。運動をした後の事とてとても美味し。食後一同靜座に付き、續いて勸語を奉讀す。斯くて精神統一成つて宮司の方より講話をお聴きする。話中、神を拜むに當つては唯單に道德的な心境許りでは無く、更に宗教的な觀念を以てする即ち神を信仰する事を以て國教となすべきだとの意見を副島先生の例話を以て説かれ我々ば一種の深い感銘を受けたのであつた而し

#### 一、訓話及注意

式終了後舍前に整列。班毎に作業分擔あり

第一、第二、第三班各二名を除く外荷車にて芹川より神社まで砂運搬、第四班及其他六名河原にて砂運搬等、直ちに部署に著く。午前十一時三十分河原の作業中止。全員荷車に砂滿載して神社に向ふ。舍内にて晝食す。味絶倫なり午後二時迄午睡す。相當疲勞せしものゝ如く時過ぐるを覺えず眠れり。午後二時より役割變更し再び同作業に従事す。午後三時三十分休憩す。其間河原の清水にて鮎を漁る疲勞を天に託し、ものゝ如く樂しき云はん方なし。休憩十五分にして再び作業開始。全員全力を盡して勤務奉仕す。又暑さ烈しく汗の流るゝや水を浴びし如し、午後六時作業中止し直ちに舍内に入り第一班より順次入浴す。茅堀の聲聞にして、全身の疲れ砂糖の湯に溶けるが如くにして悉く失せぬ。午後七時二十分夕食。後全員集合し、靜座、勸語奉讀、遙拜、参拜國歌齊唱あり。次に大口彌宜氏より神棚の拜み方、玉串の捧げ方、祝詞等に附き説明を戴き大いに得る所ありき、本日落伍者無きも、唯清水君背に至り腹痛を感じ自動車にて帰宅せり。我等はひさしく「清水」の殘

#### 五ノ二 谷口 勉

七月二十九日(金曜)

午前八時三十分過全員多賀驛前集合。先生より種々注意あり。直ちに黙々整然として全員多賀神社に向ふ。神社参拜後多賀講總本部前にて全員を四班に分ち、舍内に入る。集團勤務奉仕初式舉行。式次左の如し。

- 一、皇居遙拜
- 一、當社参拜
- 一、國歌齊唱

て九時より拜殿に參進して月並祭に參列した莊嚴極り無きが如き中にも何處か柔か味を藏して宛然平安朝時代の面影を覺せしめる。拜殿退出後作業の服裝となり玄關前に集合本日作業場たる多賀小學校に至る。此に於て多賀小學校校長先生青年學校の平等先生に初對面の敬禮を行ふ各班夫々分擔の作業を與へられ、早速取り掛る。朝來の晴天で暑氣は昨日に増して甚しい流汗淋漓忽ちにしてシャツもべさ／＼だ。が、誰一人怠らず、せつ／＼と與へられた仕事に最善を盡して居る。晝食は小學校の方にて晝飯を作つて下さつた。激しい労働の後さて眞にお美味しく働いたあとで食べる御飯の眞の味を味つた。二時迄午睡、その後又四時半迄同様の作業を續行した。作業終了後大體乍ら豫定通り完成した成果を見る時の愉快さ。これ程氣持ちのよい事は無い小學校々長先生より慰勞の御言葉を承り又先生が自分達の先輩で居らせらる由、今野先生よりお聞きし、別れを告げて多賀神社に歸つた。夕飯後靜坐勸語奉讀が了るや、感想發表座談會が開かれた。神社より頂いた茶菓を頬張り乍らくついで先生生徒共々に二日間の感想を忌憚無く吐露し、今野先生よりも此の



念きに同情せり。午後九時日夕點呼終了し床に就く。睡時騒がしかりしも先生の注意と共に静なるこゝ深谷の如く宵にして、夢の世界に入る。

七月三十日 (土曜)

午前五時起床。早朝雨降りしもの、如し。更に蟬茅蠅の聲繁く、森殿神祕骨體に達す。點呼、舍周の掃除及彦中体練あり。午前七時朝飯をさる。午前八時より宮司殿より「神社は國家の宗祀なり」に附きて講話あり。午前九時より多賀小學校にて作業開始す。作業項目左の如し。

一、土堀り

二、トロツコにて土運搬(運動場へ)

三、運搬せる土ならし

四、穴堀り

太陽雲間より照り輝くこと酷烈なり。暑さ何ぞ！各々汗にまみれて奉仕す。正午に至り當校講堂にて食す。引續き午後二時迄午睡す。午後二時より作業分擔を變更し、作業開始す。熱心午前増し、無我の境地に達したり。午後三時半休憩す。南支に活躍せる皇軍の勞を味はひたる心地す。茶の味の最高を得たり。牡丹餅にて腹を満たす。約十五

行ひ緊張裡に國歌齊唱を行ひ、村山先生の號令で彦中體操を行つて、朝食に就いた。

午前七時三十分勸語奉誦を致し本殿に参拜したまふを捧げた。

其の後拜殿に入り校長先生から本神社に就いて、及特色をお聞きした後月並祭に参列した。其の後作業服に整へ、多賀小學校へ勤勞實踐に向つた。本日は雨天の爲仕事を変更し小學校の清掃を行ひ又どくだみを整理して干した。後先生方と愉快に運動を行ひ、中食後午睡にうつた校長先生から静坐の要領を教へられた。休息後校長先生から日露戦争當時旅順の攻撃及學生時代の思出、經驗談等をお聞きし、一同それに熱心に聞き入つた。

夕食後七時三十分から八時三十分迄感想發表座談會が催された。

午後九時就床

八月二日 (火曜)

午前五時起床。昨夜の汚名をそぐ爲全員一言も話さず早く眠つたので、今朝は頭が晴々としてゐた。點呼を済まし掃除を行ひ洗面後終業式が行はれた。校長先生から種々お賞めの言葉を戴いたが、今後益々先生方の御期待に背かないやうに、四ノ一は頑張ることを決

分の休憩にて、再び作業分擔變更ありて、作業に着手す。勤勞奉仕の最後だ。身も碎けよとばかり働けり全員黙々たり。午後五時遂に作業終了す。當小學校校長先生は彦中生時代に歸られて、我等と共に勤勞せられたりしが最後に臨み元氣満々たる姿にて、感謝の辭を述べられたり、我等の愉快に限りなし。校門を出づるに及び、作業中戯言を發して我等を慰められし平等先生の見送りを受く。一同笑顔に離別の心残りな浮べて敬禮しつ。全員黙々整然而も苦辛後の樂しさに心を踊らせつ、神社に向ふ。舍内に入り直ちに風呂に入る。午後六時過夕食す。午後八時より感想發表會あり。午後九時床に就く。熱心烈しく寝れず子の刻に至り漸く眠に就けり。

七月三十一日 (日曜)

午前五時起床。午前六時過より集團勤勞奉仕終了式。舉行午前六時三十分朝食をなす。神社裏の名勝の池、御勸使部屋、勸使の御風呂など拜觀す。以後退舍準備に取かゝる。午前七時三十分整列して神社参拜し午前八時多賀驛前にて解散す。平等先生の笑顔を驛頭に發見。一同の嬉し限なし、此處に無事有効なる集團勤勞奉仕を終了したり。

心した。後記念寫眞をとり駈足にて驛に向つた。我等待望して居りし宿泊集團勤勞奉仕も無事に終了した。

將來この奉仕は我等のよい思出となるであらう。又種々多くの貴い經驗等、神に仕へる道を教へて戴き、卒業後直に實社會に出る我等にさつては非常なる利益を得たこと、思ふ今まで先生方と寢食を共にし、一心同體となつて愉快に運動をなすやうなことは経験しやうとしても経験すること出来なかつた。かく顧るにこの奉仕こそは我等にさつて無限の大なる利益があつたと思ふ、非常に有意義な舉だつたと思ふこの非常時局下に於てはこのやうな團體的宿泊勤勞奉仕は非常に有意義なものだ。これを記念として、我等は更に心身の鍛鍊に努力しよう。

○ 四ノ二 松田 又一

八月二日 (火曜)

朝八時半に四年二組の者一同は多賀驛前に集合し、校長先生外五人の先生に引率されて多賀神社に向つた。神社に着くと直ぐに参拜をし、神社内の宿泊所へ行つた。朝から雨が絶えず降り續いて、鬱陶しい天氣であつた。九時より宮城遙拜本社参拜國歌齊唱をなした後

○ 四ノ一 林 榮一

七月三十一日 (日曜)

朝八時半多賀驛に集合し隊伍を整へて、元氣潑刺と多賀神社に向ひ、心身を清めて、神社に参拜した。

後、直に宿泊所に着き、校長先生の訓話を傾聴した。後寺本、堤兩先生の注意があつて、作業服に整へ宿泊所前に整列し、直に神社境内の整地をなす可く、芹川の砂を運搬し、午前の勤勞實踐を無事終了し、楽しい中食に移つた。

午睡の後再び勤勞の實踐を行つた、其の間菓子に戴いた。神社に歸り入浴して、一日の汗を流し落し、清々しくなつた。

夕食後五分間の静座があつて、勸語奉誦に還り、宮司様のたまふ捧げる禮法をお聴きした、その稽古は行ひましたが、失敗續きで弱つた蚊の多いには大變難儀した。

然し無事多賀神社宿泊集團勤勞奉仕の一日を閉じた。就寝九時。

八月一日 (月曜)

午前五時起床

點呼後内外を清掃し宮城遙拜、當神社参拜を

校長先生の訓話及び主任の先生の御注意があつた。十時半より勤勞實踐であるのだが、折悪く雨は止みさうにもなかつたので、校長先生が室内で私達に静坐について話して下されました。その外に汗の出る奇妙な運動をお教へになり、又鷹の按摩等も丁寧に教へて下さりました。中食の時には第一班が給仕をしました。それより二時迄自習したい者は自習し眠い者は午睡をし、二時より愈々勤勞實踐が行はれました。それは拜殿の掃除をさせて貰ひました。四時半には一班より順序に入浴致しました。その後一時間ばかり自習をし六時に第二班の給仕に依つて楽しい夕飯を戴きました。七時半より五分間静坐をなし、勸語奉誦申し上げた後、福宜の大口氏より神殿参拜の方法に就いての講話をして戴きました九時に點呼があり、その後一同は床に就きました。

八月三日 (水曜)

午前五時起床。直ちに床をたみ、一同整列す。點呼終りて後、順次に洗面をなす。六時に到りて、一同神殿の内に坐し、参拜す。我は潔白なる感情に打たれた。雨は小降りなりしが、日輪の光すが／＼しく照り出し、外に出て彦中體操をなし、境内の掃除をな



せり。七時、第三班の給仕に依りて朝食をす  
ます。七時半より静坐、勸語を奉誦致したる  
後宮司の御方の神道精神に關する御講話を戴  
く。空は一時からりと晴れたるが、亦曇りて  
小糸の如き雨降り續く。九時より愈々勤勞實  
踐。多賀小學校の裏の開墾を行ふ。一同熱心  
に勤勞したれども、無駄口を使ふ者多きは甚  
だ遺憾の至りなり。やがて雨ひどく降り、一  
同濡れ鼠となりたるも、尙續行す。十一時半  
になりて同小學校の講堂に休憩、中食はお握  
り。一時半に勤勞實踐の場所に於て記念寫眞  
を撮る雨は又小降りとなる。トロツコ一台破  
壊し、能率をさ程上らず。併し一同熱心に作  
業に従事せり。四時前に到りて勤勞を止む。  
直ちに宿泊所に歸り、入浴せる後は、いさ心  
地よし。おやつにお萩を戴く。六時第四班の  
給仕に依りて夕食をなす七時半より約一時間  
此の勤勞奉仕に關する感想發表座談會を開き  
て、非常に愉快に感じたり。九時、點呼の後  
一同樂しく夢路をたどる。

八月四日 (木曜日)

午前五時起床。先づ班より二名づつ出でて  
戸を開く。床をたみ、みて後、點呼ありて、室  
内掃除をなす。第一班は箒にて畳をはき、二

班は拭き掃除、三四班は便所の掃除なり、雨  
は絶間なく降り續く。洗面を終へたる後、一  
同雜談す。六時より集團勤勞奉仕の終了式を  
舉行。校長先生より訓話を戴く。終了式後、  
本神社の勸使の間及び御庭園を拜觀したり。  
御庭園にはいさ珍らしき石橋ありき。御池等  
も形誠によし。げに立派なる御庭園なり。七  
時に到りて第二班の給仕に依り、朝食をなす  
七時四十分、神殿前に整列し、最後の参拜を  
なして、多賀驛に向ふ。驛にて校長先生に敬  
禮し、一同解散せり。此の二日間の共同生活  
は、深き思ひ出となりて、永久に頭より離る  
ことあらじと思ひぬ。(以上)

○ 四ノ三 樋口 芳朗

八月四日 (木曜日)

いよ／＼今日は勤勞奉仕日だ。中學生活正  
に三年中而も一度も集團宿泊勤勞生活の経験  
のない僕等は半ば期待半ば不安の氣持を持つ  
てのぞんだ。

宿舎安着後直ちに作業實施青々々波うつす  
が／＼しい稻を左右に見ながら車を推す。細  
い土手道を石を滿載しての歸途相當苦しい。  
涼しい風が吹くのだが誰の額にもじつと汗が  
汗が浮ぶ。更に暫時崇嚴なる神苑の氣を呼吸

しながら庭の洒掃をする。最早正午近いので  
晝飯をさる。思つたよりうまい。これも勤勞奉  
仕の賜か。  
一時間餘の休憩後多賀小學校に於ける勤勞  
奉仕である。トロツコ運びモツコ運び等皆午  
前中と比べることのできぬほど辛い。皆手は  
豆だらけツツクは泥だらけの奮戦である。お  
八つの後、再び奉仕し宿にかへる。直ちに風  
呂に入つて垢をおとし清々とした氣持で夕飯  
をさる。食後教育勸語を奉讀をし彌宜さんの  
話を傾聴する。  
九時、小松原先生の御注意後就寢し愉快な  
夢路をたどる。

八月五日 (金曜日)

五時起床、一齊に雨戸をあけ、蚊帳をた  
む。人員點呼、洗面後、掃除をする。清々し  
い氣持で本殿に参拜する。崇嚴の極み、身も  
さけるやうな氣がする。國歌齊唱、体操の後  
朝飯をさる。靜坐勸語奉唱の後宮司の訓話を  
きく、最終日の勤勞實踐。今日は多賀小學校  
のみである。小憩をはきみ終つて晝飯をさ  
る。晝寝後又勤勞實踐。みな最終をかざら  
んものさ牡丹餅の應援を得必死の努力をつ  
ける。終にめでたく終了助役さんはじめ溢美

の言を頂戴の後、宿舎に歸る。入浴夕食後靜  
坐勸語奉唱の後感想發表座談會をひらき、諸  
先生の懇切な御訓話をきいて解散した。點呼  
後、全員就寢。  
八月六日 (土曜日)  
五時起床今日は昨日にひきかへみな熟睡し  
た。手早く蚊帳をたみ雨戸をあける。爽涼  
たる朝の氣が顔を撫でる点呼後内外を清掃し  
洗面をする。冷水が顔にふれると、全く蘇生  
の思ひがする。實に夏の朝程すがすがしいも

のほない。暑さと寒さとプラスとマイナスの  
中和したやうな氣が充滿してゐる。五時三十  
分、遙拜参拜をして氣を清め國歌齊唱の後体  
操をする。暫時の後、宮司さんがいらつしや  
る。そしてその懇切な訓話を傾聴した。朝食  
後靜坐し勸語奉誦。七時に食事をすまず。最  
後の食事だと思へば懐かしい氣持もする。少  
時休憩の後校長先生の御指揮によつて、勸使  
の間を拜觀する。建物も、壁にが／＼つてゐる  
繪もみな古い由緒あるものだと言ふことであ



## 雜 錄

### 昭和十三年學校日誌抄(一月、二月、三月)

一月一日 新年拜賀式ヲ舉行ス

八日 始業式ヲ舉行ス

九日 武道寒稽古本日ヨル初マル

十日 第四五學年ノ國漢模擬試驗ヲ施行、第四學年三組

生徒御遺骨ヲ彦根驛頭ニ送迎ス

十一日 第四五學年ノ英語模擬試驗ヲ施行ス

十二日 四五學年ノ數學模擬試驗ヲ施行ス

十四日 同窓會主催ノ小學校連絡會本校ニ於テ開催サル

十五日 武道寒稽古終了、同窓會主催ノ小學校連絡會米原



小學校ニ於テ開催サル  
支那事變ニ關スル帝國政府ノ聲明ニ就キ訓話、同  
窓會主催小學校連絡會ヲ愛知川小學校ニ於テ開催  
第四學年一組二組生徒傷病兵御遺骨ヲ彦根驛頭ニ  
送迎ス

廿四日 職員及ビ第一學年生生徒彦根驛歸還ノ御遺骨ヲ弔迎  
職員及ビ生徒代表卒業生森道之進氏ノ御遺骨ヲ近  
江長岡驛ニ弔迎ス

廿五日 彦根市葬ニ職員及ビ第五學年級長第三學年生生徒參  
列卒業生前川善藏氏ノ高宮町葬ニ職員及ビ高宮町  
ヨリノ通學生徒參列ス

廿七日 第三學年ノ父兄會ヲ開催ス  
廿八日 日本精神研究會ヲ開催ス  
廿九日 筒井先生ノ新式ヲ舉行ス

卅一日 職員及ビ第三學年三組生徒卒業生夏川鐵之助氏、  
夏川文二郎氏、三輪久三氏、佐藤朝彦氏、寺村新  
造氏等ヲ彦根驛ニ歡送ス

二月五日 卒業生ノ豫餞會ヲ開催ス  
八日 第一・四學年ノ野外教練ヲ實施ス  
十一日 紀元節拜賀式憲法發布五十年記念式舉行、國民精  
神總動員第二回強調週間第一日ニツキ高商及ビ在  
彦中等學校職員生徒團休行進ヲ行フ

十二日 第一・二・三學年ノ學期末考查ヲ開始ス  
十七日 第一・二・三學年ノ考查終了、終業式舉行、職員及ビ  
東黒田村出身ノ生徒卒業生森道之進氏ノ村葬ニ參  
列ス

廿六日 入學考查ヲ施行ス  
廿七日 入學考查ヲ施行ス  
廿八日 入學合格者ノ氏名ヲ發表ス  
以下ハ「彦中誌」所載ニ付略ス

### 校友會各部役員

昭和十三年度

會長 足立校長先生  
副會長 堤先生

#### 學藝部

部長 寺本先生  
理事 居井先生、吉村先生  
委員 五年 横田不二夫、豆子清一  
四年 松田信、島津清  
三年 柴田正男、小川誠一

#### 雜誌部

部長 尾田先生  
理事 平井先生、居井先生、今野先生、大崎先生、尾本先生  
委員 五年 一谷道雄、谷口勉、西山子得

十二日 國民精神總動員第二回強調週間第二日ニツキ訓話  
ヲ行フ

十四日 國民精神總動員第二回強調週間第四日ニツキ訓話  
ヲ行フ

十五日 國民精神總動員第二回強調週間第五日ニツキ訓話  
第五學年ノ學期末考查ヲ開始ス

十六日 國民精神總動員第二回強調週間第六日ニツキ訓話  
ヲ行フ

十七日 國民精神總動員第二回強調週間第七日ニツキ訓話  
第一・二學年生生徒ハ北野神社ニ、第三・四學年生  
生徒ハ千代神社ニ參拜ス

十九日 第五學年ノ學期末考查終了、第五學年生生徒ノ御座  
所拜觀、校旗ニ對スル告別式ヲ行フ  
廿八日 山階宮大妃殿下薨去遊バサレシニツキ謹話、御靈  
ニ對シ奉ツテ遙拜ヲ行フ

三月一日 第四學年ノ學期末考查ヲ開始ス  
五日 第四學年ノ學期末考查終了、第四學年生生徒ノ終業  
式ヲ舉行ス

七日 第五十回ノ卒業式ヲ舉行ス  
十日 陸軍記念日ニツキ訓話、全校職員生徒招魂社ニ參  
拜、正午ヲ期シテ默禱、職員及ビ第一學年四組生  
徒卒業生福山松太郎氏ノ歸還ヲ彦根驛ニ歡迎ス

#### 圖書部

部長 今野先生  
理事 五味先生、薄木先生、大崎先生、小松原先生  
委員 五年 高田善之助、江川昌男、小川清孝、滿島俊次、嶋倉昌  
一

#### 武道部

部長 平井先生  
理事 村山先生、田中先生  
委員 五年 富永信雄、勝文夫、多田清茂  
四年 中津孚、松田又一、西島寅次、大師慶造  
三年 北川喜八、長谷曉、磯谷勇、竹林武則

#### 端艇部

部長 原田先生  
理事 金盛先生、森田先生  
委員 五年 栗生崎雄、山中彌三、岩根義一  
四年 松井榮助、中村滋  
三年 上田恒男、北川芳夫、内田悟

#### 野球部

部長 猿山先生  
理事 柏島先生、尾本先生



委員 五年 大森圭造、細川常雄、上杉阿沙  
 四年 菅井喜造、草野文平、川村博通  
 三年 山中利一郎、近藤次三郎、宮川一夫

庭球部  
 部長 高塚先生  
 理事 水本先生  
 委員 五年 小林隆  
 四年 小出正雄、坂邦男  
 三年 吉田一雄、奥田元重

競技部  
 部長 丸茂先生  
 理事 小松原先生、山縣先生  
 委員 五年 小倉源造、三谷信昭、岡田重夫  
 四年 葛滋郎、清水正男、村岸眞  
 三年 長野弘、塚本一雄、有川英治

水泳部  
 部長 白井先生  
 理事 後藤先生、吉村先生、杉原先生、筒井先生  
 委員 五年 倉橋泰造、北村久太郎  
 四年 中村光信、江龍貞藏  
 三年 戸所治雄、花澤宏

校友會會計

昭和拾參年度

收入ノ部		金額
前年度繰越	金	四二・九〇
職員會費	費	一六五・〇〇
生徒會費	費	五、二一四・〇〇
利子金	金	四一〇・〇〇
合計	計	五、八三九・九〇
支出ノ部		
學藝部	部	一一五・〇〇
圖書部	部	三〇〇・〇〇
雜誌部	部	五〇〇・〇〇
武道部	部	四〇七・〇〇
端艇部	部	六〇〇・〇〇
野球部	部	八六六・〇〇
庭球部	部	三三一・〇〇
水泳部	部	二四九・〇〇
衛生部	部	一七八・〇〇
園藝部	部	五〇〇・〇〇
賞品費	費	一五〇・〇〇
合計	計	一〇〇〇・〇〇

皇紀二千六百年記念式費	一〇〇・〇〇
卒業式費並豫餞會費	二〇〇・〇〇
陸上大會費	二〇〇・〇〇
行軍費	六〇・〇〇
運動具費	一〇〇・〇〇
運動場修理費	二五〇・〇〇
一般運動費	二〇〇・〇〇
縣體育協會分擔金	六八・〇〇
端艇新造費	四三・九〇
雜備費	三五〇・〇〇
豫備費	四二二・〇〇
合計	五、八三九・九〇
特別會計ノ分	
本年へ繰越	三七三・六四
端艇新造費	三七三・六四
合計	三七三・六四



編輯了語

○時局多端の新春を迎へたと思ふと、もう卒業修業の喜びが目の前に來てしまつた、この時校友會誌第四十八號がやつその編輯を終了しました。

○一見まことに見すばらしいが本年度からは月刊「彦中」が誕生したので、その方へ先生の玉稿や生徒作品や部報其の他が刺愛されたためと、一方時局重大で國策の線に沿ふため思ひきつて丁數も紙質もぐつと控へてしまつたためです。

○千原先生名譽の御戦死はまことに本校にとつて痛恨事です永く先生の御遺烈を偲びたく、本號はその大半を先生の追悼で埋めました。

○陣中だよりとして事變出動中の先輩からの通信を一部掲載し得たことを喜んでゐます。

○時下嚴寒ですが非常時下の學徒として日夜に御健闘下さることを祈つてゐます。(一月二十日)



# 彦中應援歌

(一) あゝ英傑が夢のあと

歴史は遠く三百年

金龜城頭我立ちて

尙武の風に嘯けば

(二) 花たちばなの香に匂ふ

健兒の意氣は天を衝く

氷刀腰に夜泣いて

たぎる正義の血潮あり

(三) あはれ雲待つ蛟龍の

猛者一たび地を揺れば

強風陣々雲捲いて

行く手に敵の影も無し

(四) 旌旗は高く天を摩し

金鼓勝利を告ぐる時

月の桂の香にむせぶ

今宵健兒の夢如何に

明治廿七年五月三十日内務省認可  
昭和十四年二月十五日印刷  
昭和十四年二月二十日發行（非賣品）

滋賀縣立彦根中學校内

編輯者 尾田鶴治郎

印刷者 彦根中五番町六二ノ一 斯期

印刷所 彦根市五番町六二ノ一 印刷所

發行所 滋賀縣立彦根中學校 校友會



